様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：８２２０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２２４９

研究課題名（和文）近代竹工芸の調査研究―飯塚琅カン（「カン」は「王」偏に「干」）齋を中心に

研究課題名（英文）Research on Modern Bamboo Art: Focusing on IIZUKA Rokansai

研究代表者
鈴木　さとみ（SUZUKI, Satomi）

栃木県立美術館・その他部局等・主任研究員

研究者番号：７０５２５０５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、飯塚琅カン齋の作品と制作活動を軸に、竹工芸を日本近代美術史に位置付けることを目的とした。調査は、①栃木県立美術館に寄贈された飯塚家の関連資料の精査、②琅カン齋が躍進を遂げた1930-40年代を中心に、美術工芸界における竹をめぐる活動に関する文献資料の収集、③飯塚家とその系譜、なかでも栃木県在住の重要無形文化財「竹工芸」保持者への聞き取りに焦点を置き、時代背景とともに、琅カン齋が目指した芸術としての竹工芸について考察した。
　さらに、欧米での日本の竹工芸の展覧会や個人コレクションの現地調査を踏まえ、日本の竹工芸の特質を浮き彫りにし、竹工芸の未来への発展の可能性についても検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この調査研究の成果は、フランスで初めて開催された日本の竹工芸のみの企画展「FENDRE L'AIR Art du Bambou au Japon」（ケ・ブランリ美術館、2018年）の図録への寄稿と、2020年10月から12月にかけて栃木県立美術館で開催した企画展「竹の息吹き―人間国宝 勝城蒼鳳と藤沼昇を中心に」とその際に刊行した図録において公表した。同展ではフランスの現地調査で得た知見や、2017年度に研究代表者が調査した、アメリカにおける日本の竹工芸の展示風景や出版物もあわせて紹介し、地域の文化・芸術の活性化と顕彰に貢献した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to place bamboo art in the history of modern Japanese art, focusing on the works and production activities of IIZUKA Rokansai. The research focused on (1) a close examination of documents related to the Iizuka family which were donated to the Tochigi Prefectural Museum of Fine Arts; (2) a collection of documents related to bamboo art, mainly from the 1930s to 1940s, when Rokansai was active; and (3) interviews with the Iizuka family and their followers, especially with the holders of the important intangible cultural property who lived in Tochigi Prefecture. The study also examined Rokansai's vision of bamboo art as an art along with the background of the times.
In addition, field research was conducted on exhibitions of Japanese bamboo art held in Europe and the United States, as well as on private collections. The study revealed the characteristics of Japanese bamboo art and examined the possibilities for their future development.

研究分野：工芸（竹工芸）

キーワード：工芸　竹工芸　日本伝統工芸　アメリカ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近代当初は職人的な技芸であった竹工芸が独立した芸術作品として評価される過程で、先駆的かつ主導的役割を果たした作家の一人が、飯塚琅カン齋（いいづか・ろうかんさい、1890- 1958、栃木県生まれ）である。琅カン齋の作品を筆頭に、現在、日本の竹工芸は米国でその芸術性を高く評価されている。その契機は、ロイド・コッツェン氏（元ニュートロジーナ社会長）の蒐集したコレクション約 1,000 点のうち 100 点を展示した「Bamboo Masterworks」展 （ニューヨーク、1999 年）だろう。本来用途性のある竹花籠を、そのフォルムや質感からひとつの立体造形として捉えた斬新な視点が米国美術界で大きな注目を集めた。同コレクションは 2002 年に約 900 点がサンフランシスコ・アジア美術館に寄贈となり、常時約 20 点が展示されている。2003 年には日本にも「竹の造形 ロイド・コッツェンコレクション展」として里帰り巡回した。同図録の「コッツェン・コレクションの特徴と近代の竹工芸」において諸山正則が、出品作品に即しつつ近代の竹工芸の展開を解説し、主要な作家が表明した造形性への考察を行っている。以降、ボストン美術館、シカゴ美術館などでも収蔵が進み、2017 年 6 月から 2018 年 2 月にかけて、メトロポリタン美術館にて初の竹工芸の企画展「Japanese Bamboo Art The Abbey Collection」が開催され、入場者が 47 万人を超え話題となった。

一方、日本ではあまりにも竹が身近であるためか、美術館での所蔵も、竹工芸を美術史的視点から論ずる研究も進んでいない。個別の作家研究としては、諸山正則、友永尚子、青木 宏、河野エリの諸氏が、大阪の前田竹房齋、大分の生野祥雲齋、琅カン齋、琅カン齋の兄・二代鳳齋について各作品を中心に論じている。また研究代表者も、近年発見された飯塚家の資料や落款等を調査し、琅カン齋の制作の背景や文化人との交友関係について「近代竹工芸の揺籃期— 飯塚琅カン齋と栃木」（『竹のめざめ—栃木 竹工芸の精華』展図録、2014 年）に論じている。

なお、竹文化をめぐる日米の文化交流史的な視点からは、岩松文代が「米国における日本の竹美術の愛好と蒐集」について考察しているが、作品の造形性にまで踏み込んではいない。

このように、個別の作家については研究がなされているものの、琅カン齋を核として近代竹工芸の動向を体系的、包括的にとらえた研究はまだなく、そこに本研究の新奇性がある。かつて花籠の輸出元であった中国に芸術表現としての竹工芸が存在しない現在、日本の竹工芸は世界に誇れる芸術といえる。世代交代による作品の散逸が危ぶまれ、海外で収蔵されている作品も恒久的な収蔵の保障はされない今、関係機関への調査は緊急性を要していた。琅カン齋はどのように竹工芸を芸術に昇華させたのか、その後の展開と海外での評価あわせて考察することが、ひいては多様で豊かな日本近代美術史を記述することにつながると考えた。

２．研究の目的

本研究は、飯塚琅カン齋を軸に、彼の作品と制作活動、竹という素材をめぐる工芸・デザイン界の諸動向を包括的に調査・研究し、竹工芸を日本近代美術史に位置付けることを目的とした。そこで、まず飯塚琅カン齋の作品および関連資料を調査した。また琅カン齋が躍進を遂げた 1930-40 年代を中心に、商工省工芸指導所やブルーノ・タウト、民藝派の作家たちによる美術工芸界での竹をめぐる活動にも着目した。

さらに、欧米における竹工芸作品の受容と展開を検証し、竹工芸の未来への発展の可能性を検討することも目的とした。

３．研究の方法

はじめに飯塚琅カン齋についての基礎的な情報、および後進への影響を確認するため、飯塚家とその系譜、なかでも栃木県在住の重要無形文化財保持者である勝城蒼鳳氏と藤沼昇氏を中心に、文献資料の収集および聞き取り調査等から進めていった。令和 2 年度には、所属研究機関である栃木県立美術館に、飯塚家より膨大な関連資料が寄贈され、その整理と内容の精査に努めた。さらに、帝展、日展を中心とする美術工芸における竹工芸批評や、琅カン齋が竹工芸界においてその存在を強固なものにしていった 1930-40 年代の新聞・雑誌記事等の調査も並行して行い、時代背景とともにその展開を考察した。

また、研究期間中に開催された国内外の竹工芸の展覧会への調査協力を通して、日本の竹工芸の展開や海外での評価を考察する準備を進めた。

４．研究成果

これまで、研究代表者は国内外の竹工芸の展覧会の調査協力のほか、栃木県立美術館で「竹のめざめ—栃木 竹工芸の精華」展（2014 年）を開催し、近代竹工芸の展開を飯塚琅カン齋を軸に研究し紹介してきた。また、2016 年には 2 ヵ月間、アメリカ 9 都市において、「アメリカにおける日本の竹工芸作品の調査研究」を完遂した。メトロポリタン美術館では企画展に向けた出品作品の調査に協力したほか、主要な美術館や個人のコレクションを調査し、国内に残る作品だけでは不十分な点を補完すべく情報収集を進めた。本研究は、こうした研究を発展させるものであると同時に、琅カン齋が躍進を遂げた 1930-40 年代の工芸・デザイン界における、素材としての

竹をめぐる伝統とモダニズムの交錯をも視野に入れた研究を目指した。

（１）飯塚琅カン齋の作品と制作活動

研究開始当初は遺族宅にて資料の整理を進めていたが、令和 2 年度に、所属研究機関である栃木県立美術館に飯塚家の関連資料が寄贈された。覚書帳に記された情報と現存作品とを照合し、素材や技法名を整理した。書簡やアルバム、新聞記事のスクラップから判明した後援者や購入者には、工芸家だけでなく、著名な日本画家や政財界の重鎮の名もみられ、琅カン齋の幅広い交友関係や作品の受容についても明らかになった。

1930-40 年頃は、商工省工芸指導所や建築家のブルーノ・タウト、民藝運動の作家たちが日本の「手仕事」に注目していた時代であった。伝統的な素材である竹は、この時代の工芸・デザインを象徴する位置を占めることとなる。雑誌『工藝指導』、『工藝ニュース』などから、時代背景を加味した素材としての竹の扱い方を分析し、さらに柳宗悦やブルーノ・タウトの琅カン齋批評より、琅カン齋が竹工芸の芸術性を高めていくために展開した理論武装と彼の芸術観を明らかにした。また、当時の対外グラフ誌『NIPPON』の「パリ万国博覧会号」（11 号、1937 年）では、国際文化振興会が出品した様々な工芸品の文化的背景を紹介し、日本を代表する「陶工」として濱田庄司が、「竹工芸家」として琅カン齋が大きく取り上げられた。さらに、同会が製作した「KBS 文化映画」のうち、「竹籠」（1940 年）は琅カン齋を特集していた。このように、伝統性と近代性を兼ね備えている点で、竹工芸では琅カン齋が、日本文化の国際的なアピールに重要な役割を果たしていた。

1930 年代半ば、琅カン齋が自身の作品の品格を示し、竹工芸に対する理解を得るために自らの作品を「真」・「行」・「草」の三態を用いて語っていたことはしばしば論じられてきた。しかし、戦中、戦後の制作におけるその概念の展開について検証されることは少なかった。そこで、日展出品作や依頼主との交流、関係者への聞き取りなどから、彼が目指した芸術としての竹工芸の到達点を考察した。籠師であった父・初代鳳齋から竹編技術を習った 1900 年頃は「唐物写し」の制作から始まった琅カン齋だったが、1931 年の帝国美術展覧会初入選を皮切りに受賞を重ね、1939 年には第 3 回新文部省美術展覧会で竹工芸界初の審査員に任命された。その頃には、卓抜した技による籠の造形と銘のイメージのみで独立した自然観を表現し、竹の新たな創作の可能性を切り拓いていた。1950 年代に制作された青磁大壺を写した作品においては、いわゆる「唐物写し」にとどまらず、深みのある染色と緻密で硬質な編みが生み出す造形美によって、格の違いを超えた竹の品格を表現しようとしていた。戦前に示された「真」の「竹かと思えるほど手の入った精巧なもの」という方向性は、戦後、他分野の工芸品の素材感や品格にまで迫る竹独自の表現へと発展したのである。1958 年に死去した琅玕齋の戦後は長くはない。しかし従来の「真」の格の高さはそのままに「世界に受け入れられる気品のある作品」を作るべく、さらなる竹の可能性を模索していた。その作品と制作の理念は、次男の飯塚小カン齋をはじめ、生野祥雲齋など後進の作家に大きな影響を与え、日本の竹工芸は世界が注目するバンブー・アートへと展開したのである。

（２）欧米における竹工芸作品の受容と展開

平成 30 年度には、海外での日本の竹工芸の評価を検証するため、欧州では初となる大規模な日本の竹工芸展「FENDRE L'AIR Art du Bambou au Japon」（主催：ケ・ブランリ美術館、パリ）を現地調査した。ここでは欧州の蒐集家のコレクションや、1925 年のパリ万国装飾美術工芸博覧会への出品作品および関連資料を確認することができた。「ジャポニスム 2018」関連事業に位置付けられた同展のほか、「四代田辺竹雲斎」展や、日本の工芸・デザインを紹介した展覧会（ギメ東洋美術館、パリ装飾美術館ほか）もあわせて調査し、出品作家や研究者、美術商、欧米のコレクターなど多くの関係者と交流した。その結果、フランスでは作家の系譜や伝統的技法が重視され、その上で作家独自の作風に関心を持たれる傾向が見えてきた。この点は、先にコンテンポラリー・ アートとしての評価を得つつある米国の受容過程とは対照的である。欧米での竹工芸の評価を比較検証し、それに伴う日本の竹工芸の展開を考える上で、本調査は大きな意義があった。本研究の成果の一部として、同展図録『FENDRE L'AIR Art du Bambou au Japon』（「空を裂く―日本の竹工芸」展覧会図録、仏語版、Musee du Quai Branly-Jacques Chirac, Skira Paris）に「Le《cas》Rokansai」を寄稿した。

また、令和元年度より日本国内を巡回した「竹工芸名品展：ニューヨークのアビー・コレクション メトロポリタン美術館所蔵」展（会場：大分県立美術館、東京国立近代美術館工芸館、大阪市立東洋陶磁美術館）への調査協力を通して、出品作家や研究者、美術商、来日した欧米のコレクターなど多くの関係者と交流し、米国における竹工芸作品の受容と展開の一例を考察した。同展は竹の作品と巡回館の所蔵品とをあわせて展示していたため、会場により趣向が全く異なっていた。なかでも東京国立近代美術館工芸館では、同時代に制作された他分野の工芸作品と取り合わせており、日本近代工芸史における竹工芸を考察する上で格好の機会となった。

（３）本研究のまとめと意義

以上のように、竹工芸を日本近代美術史に位置付けるため、琅カン齋が躍進した 1930-40 年代の時代背景とともに、彼の作品と制作活動について考察を深めた。海外調査も踏まえて琅カン齋の後進への影響も考察し、この調査研究の成果は、2020 年 10 月から 12 月にかけて栃木県立美

術館で開催した企画展「竹の息吹き－人間国宝 勝城蒼鳳と藤沼昇を中心に」とその際に刊行した図録において公表した。同展では栃木県在住の重要無形文化財「竹工芸」保持者である勝城蒼鳳氏と藤沼昇氏を中心に、栃木の竹工芸の源流ともいえる二代飯塚鳳齋や飯塚琅カン齋、歴代の人間国宝、さらに全国で活躍している作家まで、約 100 点の作品により、海外でも高い評価を得ている竹工芸の“ 現在 ”を紹介した。両氏の作品の考察を通して、琅カン齋が得意とした「束ね編み」の技法に創意を加え、新たな表現を生み出す過程を明らかにし、現在の人間国宝の独自性や日本の竹工芸の特質を浮き彫りにした。勝城氏との対談や藤沼氏による講演会では制作の背景に迫り、貴重な証言を得ることができた。さらに両氏の「わざ」を記録した文化庁の記録映画を上映したほか、研究初年度（平成 30 年度）に調査したフランス、および平成 29 年度に調査したアメリカにおける日本の竹工芸の展示風景や出版物もあわせて紹介し、地域の文化・芸術の活性化と顕彰に貢献した。

研究期間の後半は、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行により、予定していた国内および海外調査を中止･延期せざるを得なかった。しかし感染が落ち着きつつあった最終年度末には、アメリカで竹の作品を専門に扱うギャラリーが来日し、東京と大分会場で開催された会合に出席することができた。会派を超えた作家たちをはじめ、コレクター、研究者など関係者が 3 年ぶりに対面で集い、これからの竹工芸の展望について活発な意見交換がなされた。

今後の研究課題としては、飯塚琅カン齋関連の研究を深めていくためには、引き続き寄贈資料の整理と考察を進めるとともに、関西の竹工芸界を牽引した早川尚古齋や田辺竹雲斎、大分の生野祥雲齋との比較調査や、竹工芸の展開の背景となった煎茶道や華道との関係など、今回の研究ではあまり触れることのできなかった課題が残る。また竹工芸の未来を検討するには海外での評価と視点は不可欠で、竹工芸のコレクションを所蔵するイギリスやドイツの美術館の調査も必要と考えている。今後さらに研究課題を定め、精進していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鈴木さとみ	４．巻 図録
２．論文標題 「岩田久利の黒色ガラス―「闇」に潜む光と彩」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『町田市立博物館所蔵　岩田色ガラスの世界―岩田藤七・久利・糸子―』展図録	６．最初と最後の頁 pp.88-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木さとみ	４．巻 図録
２．論文標題 「創造する伝統―人間国宝 勝城蒼鳳と藤沼昇の制作から」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『竹の息吹き ―人間国宝 勝城蒼鳳と藤沼昇を中心に』展図録	６．最初と最後の頁 6-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Satomi Suzuki	４．巻 図録
２．論文標題 Le《cas》Rokansai	５．発行年 2018年
３．雑誌名 FENDRE L'AIR　Art du Bambou au Japon（「空を裂く―日本の竹工芸」展覧会図録、仏語版、Musee du Quai Branly-Jacques Chirac, Skira Paris）	６．最初と最後の頁 255-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Satomi Suzuki	４．巻 図録
２．論文標題 Artisanal Bamboo Works by Iizuka Rokansai	５．発行年 2018年
３．雑誌名 FENDRE L'AIR　Art of Bamboo in Japan（「空を裂く―日本の竹工芸」展覧会図録、英語版、Musee du Quai Branly-Jacques Chirac, Skira Paris）	６．最初と最後の頁 255-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計6件

1．著者名 鈴木さとみ、志田康宏、大城茉里恵、武関彩瑛	4．発行年 2022年
2．出版社 栃木県立美術館	5．総ページ数 32
3．書名 「題名のない展覧会―栃木県立美術館　50年のキセキ」展ブックレット	

1．著者名 鈴木さとみ	4．発行年 2021年
2．出版社 神奈川新聞社	5．総ページ数 120
3．書名 『町田市立博物館所蔵　岩田色ガラスの世界―岩田藤七・久利・糸子―』展図録	

1．著者名 鈴木さとみ	4．発行年 2020年
2．出版社 栃木県立美術館	5．総ページ数 152
3．書名 『竹の息吹き　―人間国宝 勝城蒼鳳と藤沼昇を中心に』展図録	

1．著者名 鈴木さとみ	4．発行年 2018年
2．出版社 栃木県立美術館	5．総ページ数 32
3．書名 「工芸の教科書」展鑑賞ガイド	

１．著者名 Musee du Quai Branly-Jacques Chirac	４．発行年 2018年
２．出版社 Skira Paris	５．総ページ数 303
３．書名 『FENDRE L'AIR　Art du Bambou au Japon』（「空を裂く－日本の竹工芸」展覧会図録、仏語版）	

１．著者名 Musee du Quai Branly-Jacques Chirac	４．発行年 2018年
２．出版社 Skira Paris	５．総ページ数 303
３．書名 『FENDRE L'AIR　Art of Bamboo in Japan』（「空を裂く－日本の竹工芸」展覧会図録、英語版）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関